



愛隣幼稚園..... 園だより 12.4月号

水を注ぎましょう

首を長くしてまだか、まだかと待った春が、子どもたちがやってくるこの時に合わせて、庭の桜を満開にしてくれました。梅も沈丁花も3月になってやっと花をつけた今年の春でした。「まだかまだか」と待った私たちですが、必ず春が来ることを信じて疑うことはありません。今年のように遅い春はあっても、春がこないことはないからです。少なくとも私の記憶には桜の花が咲かなかった春という記憶はありません。だから私たちは土の中に植えた球根にも「まだかまだか」と思いながらも、土が乾かぬように水を注ぎ続けます。梅や桜の木がまだ幼木であれば、肥料はいるか水は足りているかと気にかけ世話をやくのです。春がくると信じているからです。

さて、愛隣幼稚園にも「春」はやってきます。幼稚園の「春」も期待と喜びにあふれています。でも同時にドキドキとわくわくが入り混じった複雑な空気が流れていたりもします。

大きい組になった子どもたちは、おおむね張り切っています。急に大きくなって小さい組の仲間たちに優しく接してくれたり、お世話をやいてくれたり・・・大人は大きくなってすごいことだと感心したりします。が、それも長くは続きません。頑張って一生懸命お兄さんお姉さんになってみても、その気持ちはいつも快く受け取ってもらえないからです。「言うこときいてくれな〜い」のです。複雑です。新しく幼稚園の仲間になった子どもたちはどうでしょうか。楽しみにやってくるかもしれませんが、大好きなお母さんとのまさかのお別れに、衝撃を受ける子どもたくさんいるはず。「おかあさ〜ん」「ママ〜」涙がいっぱいこぼれるけれど、「しかたない、がまんしておっきいシャベルであそぼう!」と、涙をこらえ勇気を振り絞ってでかけた砂場。ふとした瞬間に手放した“ぼくのおっきいシャベル”は、知らぬ間にあの子の手の中に。また、涙がこぼれてしまいます。きっと「こんなはずじゃなかった」と思っているに違いありません。複雑です。大人たちはどうでしょうか。初めての幼稚園のお家の方は子どもたちの涙や笑顔に一喜一憂の毎日。足取りの軽い朝ならば、「幼稚園に入れてよかった」と思えますが、帰ってきた子どもに「今日は誰ともあそばなかった・・・」と言われ、朝になって「ようちえん、いかない」などと言われれば、親のほうがちがかりしてしまいます。「幼稚園にいれてよかったの・・・?」とこちらも複雑になってしまいます。

春の暖かい明るい陽射しの中、希望に満ちあふれて新しい幼稚園生活は始まります。が、やがて子どもも大人も複雑な思いに包まれていきます。大丈夫だろうかと大人は心配でたまらないこともあるでしょう。そんな時には思い出してほしいのです。『春は必ずやってくる』のです。私たちはそれを知っています。信じています。信じて疑ったことはありません。あなたの手を離れたその球根、その幼木はまだ植えられたばかりではありませんか。そんなに簡単には根を張ることも、芽を出すこともできないのです。だから、乾いた土には水をあげましょう。肥料が足りないようなら加えましょう。強い陽射しの日、北風吹きすさび日、私たちは「春がくる」と信じて、この球根を幼木を慈しみ育てていきましょう。まだ芽が出ないと慌てて土から掘り出したりしてはいけません。今、張りだしたばかりの細い根を引きちぎってしまうかもしれませんから。信じて水を注ぎましょう。

『わたしは植え、アポロは水を注いだ。しかし、成長させてくださったのは神です。』(コリントの信徒への手紙一 3章6節) 神様は「春」を約束してくださっています。